

文献紹介

橋本直子 著

『耕地開発と景観の自然環境学—利根川流域の近世河川環境を中心に—』

古今書院 2010年2月

240頁 14,000円+税

本書は、橋本氏が2008年9月に東京大学に提出された博士論文（環境学）「16～19世紀における河川環境の変動が耕地開発に与えた影響評価」を改題して公刊されたものである。

橋本氏が2009年に『地方史研究』の誌上において「利根川中流域における河道変遷の再検討—一六世紀後半から一七世紀前半を中心に—」を発表された際、利根川中流域における利根川の河道変遷に関する最新研究の一端を読み取ることができたが、紙幅の関係で、関連史料や図版の提示は少なく、十分な紙幅を得て、早くその全貌を公刊していただきたいと念じていた。今回、ようやく、その願いが叶えられた。提示された関連史料一点・一点を味読し、多くはカラーの図版を熟視しながら、二日間をかけて、ひと息に読了した。

本書の構成は、以下の通りである。

- 第1章 序論
- 第2章 研究の方法
- 第3章 自然環境変動と耕地開発
- 第4章 利根川流域の自然環境変動の視点からみた河道東遷
- 第5章 利根川河道改変地域の新田開発
- 第6章 デルタの干拓新田:東京低地
- 第7章 台地部の畑作新田:猿島台地
- 第8章 低湿地の開発1:小貝川中流域鳥羽谷原
- 第9章 低湿地の開発2:豊田谷原「四ヶ村」の開発
- 第10章 江戸幕府の新田開発政策と関東
- 第11章 河川環境の変動と用水改変:葛西用水
- 第12章 結論

全12章に及ぶ本書の研究目的は、①利根川中流域における16世紀後半から17世紀初頭にかけての河道変遷のプロセスの全貌を明らかにすること。

②自然環境の変動、特に河道の改変と耕地開発の進展の相互関係を明らかにすること、の二点である。

またこの研究目的は、小氷期後を含む17～19世紀は河川環境の変化期であり、17世紀から18世紀前半における新田開発による耕地開発の進展と、18世紀後半には耕地開発は停滞し、耕作放棄と再開が各地でおこなわれた実態は、河川環境の変動と深い関係があるにもかかわらず、従来の研究では十分明らかにされていないことによると明記されている。

本紹介では、章ごとの内容を網羅的に紹介する一般的なスタイルはとらず、橋本氏が研究目的と明記されている上記の二点、すなわち、本書の核にあたる①と②に直結する章に関して、内容の紹介をすることとしたい。

まず、本書の前半において、橋本氏がその全容の復原と解明を試みられた研究目的の①に関連する第2章から第5章は、本書の白眉であり、紹介者が三度も繰り返して味読してしまったほど、その提示史料・復原図ともに圧巻である。大学院在籍中の橋本氏が、その復原と解明に全力を注がれたであろうことは、一読すれば明らかである。

利根川の流路の変遷およびその復原に関する従来の研究は、大きく二つに分断されていた。まず、中世史(戦国史)の場合、下総の関宿城下において常陸川と太日川が繋がっていたか否かに研究者の関心が集中し、両河川を結ぶ逆川の存在とその掘削時期と、舟運の有無に議論が収斂されていた。一方、近世史の場合には、江戸幕府による統一的な利根川東遷計画の存在を前提とした旧来の研究と、東遷に基づく利根川と江戸川を結ぶ内陸水運と銚子・潮来などを中継点とする太平洋海運の実態などが議論されてきた。

ここにおいて、橋本氏は、両者の研究の隙間を補い、総合的な復原と解明をおこなうために、はじめて、戦国期から近世前期の長い時間軸をとり、利根川の中流域から下流域を視野に入れて、利根川の流路変遷の全貌の復原と解明を試みている。

まず、第2章において、1657(明暦3)年の「小

流寺縁起」をはじめとして、明治期の「長久記」まで、今日において望みうる、村方に残されている関連史料10点すべてを収集された上で、関連部分の原史料を翻刻され、その史料から橋本氏が読み取った流路変更の内容を、(筆者が読み取った内容)として、翻刻された史料の下に明記されるほど、丁寧な関連史料の紹介と内容の読み取りがなされている。

この第2章を受けて、第4章では、渡良瀬川と利根川本流・古利根川・権現堂川・赤堀川と佐伯堀・庄内古川・古利根川・逆川・江戸川の河川ごとに、関連史料のさらに詳細な解釈と関連する近世前期の武蔵国の正保国絵図や明治期の迅速測図なども援用して、68頁には橋本氏の理解に基づく河川ごとの1532年から1665年に至る年表を作成されている。当該の年表には、従来から知られていた関連史料や旧説とともに、新史料と橋本氏の理解に基づいて決定をみた年代が赤枠で囲まれており、各河川の掘削や流路変更の状況が一瞥して理解できるように配慮がなされている。

さらには、69頁から74頁において、16世紀前期から1654年まで、11枚の利根川中流域の諸河川の詳細な流路変遷の復原図がカラーで提示されている。上記の関連史料・諸河川の河道変遷に関する一覧表・流路変遷の復原図の三者を味読・熟覧し、現在望みうる最高の利根川の流路変遷史の見解とその復原図が刊行されたことを、紹介者は心から感謝したい。

耕地の開発や集落の形成などに多大な影響を与え、関東平野における骨格をなしてきた利根川の流路変遷に関する研究は、新たな基準となる橋本氏の著書の刊行を得て、より深い研究に踏み出すことができる段階に入ったと判断される。

これに続いて、第5章から第11章の各章は、近世史や近世の歴史地理学においては最も研究蓄積の厚い新田開発に対して、近世における寒冷化と河道変遷など環境変化に光をあて、新たな新田開発像の復原と解明を試みている。

歴史学や歴史地理学がおこなってきた従来の新田開発の研究は、新田の立地・形態・機能をはじめとして、開発主体の人間に重きを置くものであった。これに対して橋本氏は、主に関東平野に位置する河川流域の新田開発を具体的な事例として、17世紀から19世紀に及ぶ小氷後期の寒冷化

が、デルタや河川の下流域の新田開発に大きな影響を与えた事例に復原・検討を加えている。

橋本氏が、寒冷化にともなう気候変化を基準として、開発とその後の荒廃の実態に再解釈を試みた新田は、全国規模に及ぶ新田開発の動向を扱った第3章を前提として、東京低地(第6章)・猿島台地(第7章)・小貝川中流域(第8章)・豊田谷原(第9章)・葛西用水地域(第11章)であり、主に関東平野南部に位置する諸河川流域において開発された新田開発の実態と、その後における荒廃の実態が詳細に復原・解明されている。近世における寒冷化という環境変化を基準とした、新たな新田開発像が橋本氏によって提示されたものと判断される。

ただし、第10章のみは、「江戸幕府の新田開発政策と関東」と言うタイトルのもとで、近世前期に幕府の新田開発を主導した関東郡代・伊奈氏の開発手法と、近世中期に幕府の新田開発を主導した紀州出身の井沢弥惣兵衛の開発手法に関して、従来は、前者を「関東流」、後者を「紀州流」と二大別されてきた両者の開発の手法と実態に再検討を加えたものである。橋本氏は、主に井沢氏によって新規に開発された事例に復原・検討を加え、伊奈氏の関東流と井沢氏の紀州流には大差が無いと判断されている。

以上のように、本書が利根川の流路変遷と新田開発を柱とする、記念碑的な大著であることにまったく異論はない。

橋本氏は、明治大学の大学院において、木村礎先生のもとに学ばれ、先生が組織・実施された関東平野各地の現地調査に同伴して、現地を隈なく歩き、現地の人々に多くの故事や来歴などを聞き取り、もとより、旧家に伝えられた近世以後の古文書を深く読み込み、多くの村絵図をトレースされて、具体的な復原と解明に活用されている。普段、その一端を実際に体験している紹介者にとっても、氏が費やされた多くの時間とご苦労の計り知れないことは一瞥して了解された。その意味において、本書は木村先生のもとで学ばれた木村ゼミの記念となる著作でもある。

また、橋本氏は、本書のフィールドでもある東京低地に位置する公立の博物館に長年勤務され、本書で解明された利根川中流域から下流域の河道変遷の実態と、気候変動にともなう新田開発の実

態の復原・解明は、まさに、勤務地に足のついた研究であることは論を待たない。

最後に、後に続くものとして、本書を三度も味読・熟読しながら考えたことと、紹介者の希望も若干述べさせていただきたい。

本書は、当時、在職されていた春山成子氏のご指導のもと、東京大学の大学院・新領域創成科学研究科自然環境学専攻に学ばれ、その後、環境学の博士論文として提出されたものである。そのために、後半部においては、これまでに公刊されており、近世史および近世歴史地理学の立場から書かれた新田開発の諸論文を、「環境学」の視点から全面的に書き改められている。その過程において、専攻が自然系中心の「自然環境学専攻」であったがため、苦勞をされながら書き改められたことが、行間からも十分に読み取れる。そのためか、中世史の立場から環境史の復原・解明を進められている水野章二氏の諸研究や、歴史地理学の立場から同様の復原と解明を進められている佐野静代氏の諸研究など、環境とその変化を重視した環境史に関する最新研究が、十分に活用されていないように見受けられるのは少し残念であった。

個人的には、橋本氏本来のご専攻である近世史・近世の歴史地理学の立場から、次のご著書が編まれることを、鶴首してお待ちしたいと思う。

この点は、本書を審査された諸先生が歴史学や歴史地理学のご専攻ではないため、橋本氏が提示された新史料の解釈に関しても、史料Hをはじめとして、氏とは異なる理解がなお十分可能であるように思われる史料や、多様な解釈ができる史料も複数存在している。

異なる多様な解釈の余地が存在する史料を前提にすれば、橋本氏の説とは異なる一覧表と流路変

遷の復原図の作成も可能であると判断されよう。

また、15頁の史料の翻刻においても、写真版の原文では「上宇田村へ」と読めるが、「上宇和田村へ」と翻刻され、26頁の検地帳でも小字の「大道上」が「大通り」となされているように、初歩的な誤植も散見される。

第10章において、伊奈氏の新田開発と井沢氏の新田開発の差異を比較検討され、両者の間に大差はないと判断されているが、井沢氏の新田開発の特徴は用水路に溜井や代用水を新規に設置するという手法であった点に、両者の相違があるように紹介者には読み取れた。

さらに、近年、再発見・注目され、戦国期末から近世初頭の利根川流域が描かれていると想定され、各地の博物館において展示されている船橋西図書館所蔵の「下総国絵図」と、それを紹介された新井浩文氏の諸論文と、当該の絵図を近世中期に作成された歴史絵図であると理解する千鳥絵里氏の最新の研究（史艸46号）は、利根川の流路変遷の復原と検討に際して根本的な意味を有しているだけに、正面から取り上げて、その正否を論じられていないことは、誠に残念であった。

以上のような、紹介者の些細な感想的な諸点は別として、今後、関東平野における調査と研究を志すものが、必ず目を通しておくべき、「環境地理学的視点」からなされた、新たな記念碑的な本著の刊行を、心から喜び、味読・通読することによって、多くのご教示と今後の研究課題をいただいたことに、重ねて感謝申し上げたい。

会員諸氏も、この大著を味読・熟読され、新たな研究に踏み出されることをお薦めする次第である。

(伊藤寿和)